

よこはま動物園ズーラシア

ホッキョクグマの「ゴーゴ」の死亡について (最終報)



よこはま動物園ズーラシアで飼育していたホッキョクグマ「ゴーゴ」の死亡につきまして、多くのみなさまにご心配とご心痛をおかけしておりますことを、改めてお詫び申し上げます。

令和8年2月8日に死亡したホッキョクグマの「ゴーゴ」の死亡要因につきまして、病理組織検査の結果が判明し、全体検証結果と今後の対応策について検討しましたので以下の通りお知らせいたします。

(内容に正確を期するため、あえて専門用語を使用している旨、ご了承ください)

1 全体検証結果

実施した麻酔計画およびその経過に関する検証、病理組織検査結果等から総合的に検討した結果、本症例は麻酔管理中に突発的に発生した急性心肺停止であり、自重による肺の虚脱に伴う肺シャント※1 および低酸素血症※2 が主要因となったものと考えます。

※1：肺の酸素を取り込む機能が低下し、血液がガス交換しないまま心臓へ戻ってしまう現象

※2：動脈血中の酸素が不足していることで起きる症状の総称

2 今後の対応策

今回、これまで当園で行った麻酔実績や文献、国内外の動物園での症例等から得た情報では予見しがたい病態を発生させる結果となったことを踏まえ、今後はより様々な視点での知見の収集に努め、飼育動物に対する麻酔、健康管理を行ってまいります。また、今回のゴーゴの死亡に関する一連の情報については、(公社)日本動物園水族館協会(JAZA)生物多様性委員会や国内ホッキョクグマ飼育園館とも共有し、国内におけるホッキョクグマの今後の管理計画に活かしていくとともに、本

件に関していただいた様々なご意見やご指摘についても真摯に受け止め、動物園が生物多様性や地球環境保全の場であることを改めて認識して、動物園運営に取り組んでまいります。

具体的な対応策として、今回の事案から以下のとおり改善を図ります。

- ・定期的に体位の変換を行う等、麻酔時の動物の体位、それに伴う肺換気状態についてより配慮する。
- ・SpO₂※3 低値が持続する場合は、機器による測定困難性を考慮しつつも、実際の酸素化（酸素が血液に取り込まれること）低下の可能性を踏まえた対応を行うこととし、特に大型動物に対する麻酔では、肺シャント予防の観点から安定した呼吸確保のために、自発呼吸の有無にかかわらず早めの人工呼吸器作動を考慮する。
- ・ホッキョクグマでの動脈確保は難しいが、動脈血ガス分析による動脈血酸素分圧の評価を検討する。

※3：血液中にどれくらい酸素が含まれているかを示す数値

3 ゴーゴを偲ぶ機会について

多くの方からご要望いただきました、ゴーゴを偲ぶ機会を下記のとおり設けさせていただきます。

期間：4月15日（水）～5月15日（金）

場所：アマゾンセンター（ズーラシア園内）

内容：ゴーゴの写真の掲示、ゴーゴへのお手紙投函箱設置

※詳細はホームページをご確認ください。

〈園長よりみなさまへ〉

ゴーゴに対する深い哀悼の意と感謝を表するとともに、ゴーゴを応援していただいていたみなさまにご心痛をおかけしましたことを改めて深くお詫び申し上げます。

動物たちの死は、日々懸命に飼育している私たちにとっても悲しみが深いものであり、いつまでも胸が痛み癒されない別れとなっています。ゴーゴの命を終わらせてしまったことには、痛恨の思いを募らせています。

ゴーゴの死因について科学的な検証を行っていくことが、私たちの立場でゴーゴに向き合うことであり、ゴーゴを弔う最善の方法であると考え、これまで専門的な見地からの経過の分析等を実施してきました。そのため、ご心痛をおかけしたみなさまのお気持ちに十分にお応えできなかったことを深謝いたします。

ズーラシアを含む横浜市立動物園は、これからも野生動物保全のための役割と責務を果たし、希少な野生動物たちの命を未来へ繋げていくために、アニマルウェルフェアを重視して今まで以上に努力していく所存です。どうかご理解を賜り、今後ともご支援ならびにご協力をお願い申し上げます。

よこはま動物園 園長 村田浩一



横浜市SDGs認証制度



指定管理者：(公財) 横浜市緑の協会

お問合せ先

よこはま動物園 副園長 長倉 かすみ Tel 045-959-1298

補足資料

○概要

令和8年2月8日（日）13時頃から、とくしま動物園（受入園）へ出園するため麻酔し、検査等を実施していたところ呼吸停止および心停止となりました。救命処置を行いました。14時42分に死亡を確認しました。

○計画立案から移動実施までの主な経過

- ・令和7年10月28日

ホッキョクグマ飼育園館等が参加する JAZA 生物多様性委員会ホッキョクグマ計画推進会議にて、よこはま動物園からとくしま動物園へのゴージの移動が計画される。なお、人工繁殖技術の確立および配偶子の保存が極めて重要であるため、飼育園館に対して採精の実施が励行されている（第2報記載）。当該計画推進会議の結果を受け、麻酔をかけた状態で輸送箱に入れ、覚醒を確認した後に移送する移動計画案を作成

- ・12月3日

JAZA 生物多様性委員会から計画に基づいたゴージの移動の依頼あり。横浜市と協議を行い、移動を決定

- ・12月5～7日

受入園と協議し移動日を2月8日に決定

- ・12月26日

移動日時について2園で同時に記者発表

- ・令和8年1月14日

受入園より職員が来園、搬出入の準備状況について確認および情報交換

- ・1月26日

JAZA 生物多様性委員会から採精実施の依頼あり、1月29日に引き受ける旨回答

- ・2月5日～

降雪予報を受け、移動計画について受入園および輸送業者と対応について検討

- ・2月8日

当日の動物の体調や輸送ルート、積雪状況等を最終確認し、降雪による一部高速道路の通行止めが確認されたものの一般道での輸送が可能であったため、輸送可能と判断し、計画実施を決定

○病理組織検査

（1）結果

ア 病理組織診断名：全身性うっ血

イ 主な所見

- ・心臓：僧帽弁およびその基部の心内膜への粘液様基質の少量沈着、心内膜細胞のわずかな腫大
- ・肺：びまん性の軽度のうっ血
- ・気管支：弱好酸性物質や赤血球の混じる弱塩基性粘液様物質がしばしば充満
- ・肝臓：びまん性に類洞の軽度うっ血、多くの肝細胞で細胞質の軽度の腫大
- ・腎臓：髓質を主体にびまん性の軽度～中程度のうっ血、多くの糸球体の腫大
- ・骨格筋：筋線維横径の軽度大小不同および筋線維の波状走行が散見
- ・腸管：しばしばうっ血がみられた

ウ 検査者による所見

本例では多くの臓器にうっ血が観察されたものの、心筋線維壊死や肺水腫等の急性アナフィラキシーまたは重度の循環障害を積極的に示唆する組織学的所見は認められなかった。また、明らかな基礎疾患を示唆する組織所見も確認されなかった。

全身性うっ血性変化は、急性循環障害のみならず終末期の循環動態変化を反映している可能

性もある。

(2) 考察

病理組織検査において、全身性のうっ血は終末期に心停止に至った結果として認められたものと診断され、特定の致命的な病変やアナフィラキシー等を示唆するものは確認されませんでした。

また、気管支内に粘液様物質の貯留が認められた点は、第3報に記載した麻酔下における換気不全から心停止に至ったという臨床経過と相応する検査結果であったと考えます。

○ゴーゴのプロフィール

平成 16 年 12 月 3 日にロシアのペルミ動物園で誕生し、平成 18 年に天王寺動物園に入園しました。平成 27 年にアドベンチャーワールドへ移動し、平成 30 年に再び天王寺動物園に戻った後、令和 3 年 3 月によこはま動物園に来園しました。よこはま動物園では 2 度繁殖し、令和 6 年 11 月 18 日に生まれたライ（オス）は順調に成育しており新たな命を繋いでくれました。

○これまで発表した資料

- ・ 2 月 9 日付記者発表資料
- ・ 2 月 12 日付ホッキョクグマ「ゴーゴ」の死亡について（第 2 報）
- ・ 3 月 6 日付ホッキョクグマ「ゴーゴ」の死亡について（第 3 報）

※詳細はホームページをご確認ください。

■ホッキョクグマについて

和 名	ホッキョクグマ
英 名	Polar Bear
学 名	<i>Ursus maritimus</i>
分 類	食肉目 クマ科
分 布	北極圏
生 態	陸上最大の肉食動物でアザラシやセイウチ、死んだクジラ類などを食べています。これが得られない時期には、鳥の卵や植物などを食べることもあります。冬になると北極からの氷の広がりに合わせて南へ移動し、それが後退する夏には北へと移動しますが、地域によっては沿岸部や島などで夏を過ごす場合があります。通常、冬眠はしませんが、出産を控えたメスは巣穴の中で冬ごもりをし、出産と育児を行います。近年、地球温暖化による影響で数が激減しており、絶滅が危惧されています。
ワシントン条約 (CITES)	附属書Ⅱ：現在は必ずしも絶滅のおそれはないが、取引を規制しなければ絶滅のおそれのあるもの
国際自然保護連合 (IUCN) レッドリスト	VU：危急
当園飼育頭数	2 頭（オス 1 頭、メス 1 頭） ※今回死亡した個体を含まず
国内飼育園館	16 園館 29 頭（オス 11 頭、メス 18 頭） ※令和 8 年 4 月 9 日現在